

認識と存在

——コウルリジに於ける方法の問題——

広瀬友久

Knowledge and Existence

—Method in Coleridge's Philosophical System—

Preface Medium and Expression

I. Expression and Method

II. Method and Knowledge

III. Method and Existence

Conclusion Existence is Existence

The essence of Coleridge's definition of imagination could best be understood in the framework of Leibniz's idea of expression which explains the way of the presence of the greater (the infinite) in the lesser (the finite), while Coleridge's idea of method offers us the clue and the means for the lesser to know the essence of the greater, which is the method for knowledge, and those for the lesser to be one with the greater, which is the method for existence.

認識と存在

——コウルリジに於ける方法の問題——

広瀬友久

序説 媒介と表出

I. 表出と方法

II. 方法と認識 —科学と哲学—

III. 方法と存在 —哲学と宗教—

結語 存在は存在である

序説 媒介と表出

イギリス・ロマン派の詩人コウルリジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772~1834) は、彼の生涯に渡る思想的営為に於いて、近代思想の様々な展開を、古代ギリシャ以来の西洋思想史の流れの中に総合する可能性を探求し続けてみると考へられるが、それ故に、その多くが断片として語られてゐる彼の思想の再構成が、今日の思想的状況に尽きない示唆を与へてゆくものと期待されるのである。コウルリジの思想がこのやうな可能性をもつとすれば、それは彼が詩人であったことと無関係ではないと思はれる。

コウルリジが哲学的思索に集中することになる 1800 年前後は、約五年に渡る彼の豊饒な詩作活動がある行き詰りに陥った時期であった。彼の思索が、詩的言語の本質の解明、従ってさらに詩の創造に関はる精神の能力の解明へと向つたのは当然のことであったといへよう。この思索の中でコウルリジは、詩的言語が目指すべき本来の言語は恣意的な記号ではなく、有機生成的な自然物であり、それ故にこそ人間の本性の現はれとしての思考と、自然の法則とを一体のものとして表現し得るといふことを直観したと思はれる。さらには、このやうな言語

を成り立たせる精神は、本質的に能動的でなければならないと考へることで、若き日のイギリス経験論の影響を脱却することが出来たと思はれるのである。¹⁾

コウルリジの言語観、精神観は後年の著作 *Statesman's Manual* (1816) や *Biographia Literaria* (1817) に於けるシムボル論や想像力論の展開によって、ある形而上学的体系性を得たと考へられる。そこにはシェリングを中心としてドイツ観念論の影響が顕著であるが、スピノザやライプニッツに見られる表出 (representation or expression) の論理に沿った読みを入れることにより、より本質的な解明を施すことが可能と思はれるのである。²⁾ *Biographia Literaria* の第十三章に於ける想像力の定義に先立って、第十二章に於いて、コウルリジは能動的な精神の働きの本質へと考察を加え、それを知性 (intelligence) の自己表出 (self-representation) として捉へてゐる。そして山内志朗氏が言ふやうに、表出の論理の最も本質的な問題が無限と有限の媒介であるとするれば、³⁾

第一の想像力は人間のあらゆる認識 (表象 perception) の生きた力であり、その本源的な作動力であると私は考へる。それは、無限の「我在り」に於ける永遠の創造行為の、有限の精神の中での反復である。

(Collected Works 7, *Biographia Literaria* I, p.304)

といふコウルリジの想像力の定義は、正に表出の論理の中へ位置付けることによって、認識、存在、創造に本源的に関はる力としての想像力を捉へることができたものと言へよう。

一方コウルリジは、想像力を「融和的な媒介をする力」としたうへで、それは「理性を感覚のイメージへと一体化させ、感覚の流動を、理性の永遠性と自転するエネルギーによって組織化し、シムボルのシステムを生み出す」としてゐるのである。このやうにシムボルを想像力の産物とすることで、コウルリジは、シムボルを表出の論理の中に置いて、その本質を次のやうに把握することができたのであった。

シムボルは、個の中に特殊が、特殊の中に普遍が、普遍の中に宇宙が透けて見えるといふことによって特徴づけられる、特に、一時的なものの中にそれを通して永遠なるものが見えてゐることによって。それは常に真実在に与り、真実在を理解可能にする。そして、それは全体を表出するのであるが、それもその統一体の中に生きた一部として自らを住まはせつつさうするのである。

(Collected Works 6, Lay Sermons, The Statesman's Manual, p.30)

シムボルが生きた一部として表出する全体は、有機的統一体でなければならない。想像力がそのやうなシムボルのシステムを生み出してゆくなれば、それは、見えざるものを見るものの中に、永遠なるものを一時的なものの中に、無限なるものを有限なるものの中に表出することが可能であらう。従ってそれは、神の無限なる知性の、自然と人間の精神の内に於ける顕現そのものとなることが可能であらう。

このやうにコウルリジは正に詩人であったが故に、言語、シムボル、想像力といふやうな媒体や媒介的能力に注目し、それらをこれまた媒介的論理である表出概念のもとに解明し体系化する方向に思索を進めることとなつたのであつた。そしてそこに近代思想を総合する一つの道を開いたと言つてよいのであるが、それだけに、やはり言語や記号といふやうな媒介的なものへの注目から近代思想の解体を進めつつある現在に、様々な思考の軸を提供してくれると思はれるのである。本稿では、そのやうな軸の一つとして、コウルリジが方法をめぐって展開した思索を、表出との関係に於いて読み込んでみることにしたい。

I. 表出と方法

コウルリジは、*The Friend* (1812, 1818) の中に収められた数編のエッセイの中で、方法の問題を集中的に論じてゐるが、この方法への関心も当然、彼の媒介的なものへの注目から導かれたものと言つてよい。

その最初のエッセイに於いてコウルリジは、方法の全般的規定を行ってゐるが、それは個別と普遍の媒介をめぐって展開してゐると見ることが出来る。シェイクスピアを引用しつつコウルリジは、無教育な人間は、精神の内発的働きの欠如故に、個別の時と場所に制約された個々の事実に埋没してしまふとし、それを方法の欠如を特徴付ける態度としてゐる。従つて、方法を特徴付ける精神的態度とは、事物それ自体だけでなく、事物相互の関係、事物と観察者や被伝達者との関係などを第一に考察する態度とされることとなる。これらの関係とそれが現はれる条件を枚举し分析することが、方法の学となるわけである。¹⁾

関係の考察により、精神は個々の事物から自由となり、自らの内に先行する普遍的諸原理へと導かれる。そして今度は、それらの原理の下に個別の事物を配置し組織化することになるのである。生活に於ける方法的態度の現はれとしてコウルリジは、「すべてのものが然るべき場所に置かれてゐる」²⁾と言ふことを挙げてゐる。また方法的に勤勉な人間は、「時間を組織化して、これに魂を与へる、つまり、その本質が流れ去るといふことであり、またつねに流れたものであるといふことである時間を、自らの永遠性の中に取り上げて、これに靈的本質としての不滅性を与へる」³⁾としてゐるのである。

コウルリジは、一方、ハムレットに見られるやうな、内省や普遍化といった精神の活動そのものが過剰となつて、事物から遊離してしまふ事態にも警告を發してゐる。方法は、受動的印象(対象)と、それに対する精神のそれ自体から發する反応の間の然るべき媒介即ちバランスに基づくべきであるとしてゐるのである。⁴⁾ このバランスは、質料と形相のバランス、結合される対象と結合するエネルギーの間の比例関係などと言ひ替へられるものであるが、大きく個別と普遍の正当な媒介と呼んでよいであらう。シェイクスピアの作品の方法的卓越性を定義してコウルリジは、それは個別と普遍の間の、正当なる比例関係での統合と相互浸透にあるとしてゐるのである。⁵⁾

コウルリジはさらに、方法の語源であるギリシャ語は「前進的移行」といふことを意味するとしたうへで、その移行を可能にする持続性は、

なんらかの先行する観念が原理としてあって初めて可能となるとしてゐる。⁶⁾ 従って、コウルリジの方法概念の中心をなす個別と普遍の媒介とは、あくまで個別を出発点としつつも、それが先行する普遍に組織されてゆく過程と考へることができよう。

このやうに規定された方法は、表出の問題とはどのやうな関係にあるといへようか。無論、方法の問題を考察してみた時点に於いては、コウルリジにはまだ表出の論理を展開するだけの概念装置が整ってゐなかつた。特に自己意識への洞察は十分ではなかつたと考へられる。むしろ表出の論理への到達に、この方法の問題の考察が寄与したといつてよいであらう。しかしここではそのやうな思想形成のプロセスは問題とせず、コウルリジのシステム全体をイメージする中で、表出と方法の問題を関係付け、それぞれの位置付けを試みてみたい。

序説で述べたやうに、コウルリジにとってシムボルによる表出とは、存在者の秩序に於けるより上位の存在者が、下位の存在者に於いて現はれることであつた。そして最も高度なレヴェルに於ける表出は、無限と有限の間で実現するといふ観点から想像力の定義が行はれ、その下に認識、存在、創造の問題が一体のものとして解かれてゐたのであつた。表出の論理から観れば、認識、存在、創造は共に本質は知性の自己表出であり、その知性の自己表出を有限なる精神の内担ふ能力が想像力なのである。この知性の自己表出は、自己意識や内省と同等のものとされるわけであるが、これは正にそれらに「神そのものの表出またはある種の神の似姿が存する」⁷⁾とするライブニッツの発想を受けたものといへる。このやうに表出は、認識、存在、創造といふ人間の根本に関する諸問題の本質を、無限なる存在者の側から観て解明する鍵となつてゐる概念といへるのである。

この表出概念との関係で、個別と普遍の媒介といふことを基調としたコウルリジの方法の規定を考へてみよう。その媒介とは、あくまで個別を出発点として、しかしそれが先行する普遍に組織されてゆくことであつた。個別の事物はまづ感覚に、従つて肉体に閉じ込められた有限なる精神に現象する。しかしそれは、究極的には無限なる存在者に由来する普遍的原理の下に配置されなければならないのである。

従って方法の問題とは、その本質としては、有限なる精神の側からいかに知性の自己表出としての認識、存在、創造を実現するかの問題であることが解ってくる。それは、具体的には、科学、哲学、宗教などの人間の諸活動を、いかに然るべきあり方に導くかの問題として展開することとなるのである。

II. 方法と認識 —科学と哲学—

コウルリジは方法といふ観点から認識の問題を論じてゆく中で、自らの科学観を展開することになったと考へられる。コウルリジの時代の science が、今日の科学でないことは明らかであるが、これを敢へて科学とすることで、むしろその差異を明らかにできると期待してもよいであらう。コウルリジは科学との関係で方法を規定して、方法はそれ自体一つの科学であるが、哲学から直接生まれ出たものであるとし、その方法の媒介によって哲学は科学的なものとなり、諸科学は哲学的なものとなる、としてゐる。¹⁾ この規定は、普遍と個を媒介するものといふ方法の全般的規定と対応してゐる。哲学は普遍的原理へと向かふものであり、科学は個別的事象とまつ関はる。しかしこの両者が結びつくことなしには、科学は科学として成り立ち得ない。科学に方法が要請される所以はここにある。

科学が方法的であるためには、個別事象に埋没してゐてはならない。コウルリジは対象間の関係こそが、方法の第一質料であるとする。そして精神が対象をその中に置いて考察する関係には二通りあるとして、その第一のものが法則 (Law) であるとするのである。²⁾ コウルリジによれば、法則とは次のやうなものである。それは、その絶対的な完全性に於いては「最高の存在者」についてのみ考へうるものである。その最高の存在者の創造的イデアは、各々の存在者に位置を与へ、その位置故の属性を与へる、つまり個物に個物としての存在性そのものを与へるものである。従って法則は、その最も完全な姿に於いては、神のイデアと同等のものと考へられる。しかしいかなる科学であれそこに於いて、部分相互の関係や部分と全体の関係等が、部分の観察か

ら抽象されたものではなくて、精神そのものに起源をもつ真理によって予め定められてゐるものであるやうな場合には、例へば天文学のやうな自然科学であれば、そこに法則の存在を確認することができるのである。また幾何学のやうに、その真理が精神に起源をもつのみならず精神のうちにのみ在り続けるやうな学であれば、そこに根源的アイデアの存在を確認することができるのである。³⁾

このやうに、コウルリジが方法の学に於いて第一の地位を与へるのは、アイデアと同等のものと見做すべき法則である。法則を最高の類、實在の十分理由、神のアイデアと不可分の最高の存在者の属性として考察することからこそ、方法に必要な不可欠な根拠や原理への真の洞察が得られるとするのである。方法はすべての科学に共通の科学でなければならず、ある特定の科学に属する知識の単なる集積以上のものでなければならぬからである。それを欠いた場合、特定の科学の特定の目的に資することはできても、体系的な学知を生み出してゆくことはできない、方法とはそのやうなものでなければならぬ、とコウルリジは考へるのである。⁴⁾

さて法則とは、精神が個々の事象をその中に置いて考察する関係のあり方なのであるが、それは事象の側から抽象されたものではなく、精神のうちにある真理に起源をもつものでなければならなかつた。そしてそれは、その起源故に、最高の存在者のうちにある根本原理ともつながつてゐるものであつた。このやうな法則のうちに個々の事象を把握することによつてこそ、方法に裏打ちされた科学のシステムが成立することになるわけである。そして、普遍と個別を媒介する方法に於いて、普遍へ向ふ精神の働きが哲学であるとすれば、まさにこの法則を発見することこそ哲学の目指すところである筈である。コウルリジは、プラトンの説としつつ、哲学の究極の目的は、条件的に存在してゐるすべてのものに対して、無条件で絶対的な根拠を見出すことであり、従つて人間の知識の集積をある一つのシステムに還元することである、としてゐるのである。⁵⁾ 感覚の対象は常に流れ行くものであり、それに伴つて感覚による認知も流動的である。一方、科学の原理（法則）は恒久的なものでなければならず、従つて純粹理性の産物で

あるか、その中に植込込まれたものであるかどちらかでなければならないのである。⁶⁾ コウルリジはさらにここから、物質世界が、専ら理性から引き出された法則と同じ法則に従ふことを問題にする。この理性と経験の一致、あるいは純粹知性のイデアと物質の法則の一致ともいへる問題の答として、コウルリジは、やはりプラトンの説としつつ、その一致の根拠を得るために理性は、自らを抜けて何らかの超感覚的本質の中にそれを求めなければならないとしてゐるのである。この同時に理性の理想 (ideal) であり、物質世界の原因でもあるやうな本質、その両者の調和の設定者でもあるやうな本質が問題となるとき、哲学の究極の目的は宗教であることが明らかとなるのであり、その宗教においてこそ方法が完成されることになるわけである。⁷⁾ 方法がこの段階まで達したとき、それが無限と有限の媒介といふ表出の最も根本的な問題と対応することになるのは明らかであらう。

コウルリジが考へる二通りの関係のうちで、第二のものは理論である。理論と見なされる関係に於いては、観察や実験から得られた対象の既存の形式や性質が、ある観点から見て一定の配列を示してゐるとされる。従つて理論は、それらの記憶、想起、伝達などに利するのみならず、それらを了解し管理する目的に資することになるわけである。⁸⁾ 当然ながらコウルリジは、眞の方法は第一の関係即ち法則にこそ根ざすべきものとし、第二の関係から到達できる方法は、たかだか第一の関係を発見するための準備的なものとしかなりえないとしてゐるのである。⁹⁾

理論の場合も、やはりそれは関係の考察であり、方法の問題の中に位置付けられるものである以上、そこには精神的なものの先行が見られなければならない筈である。コウルリジはその証拠を、彼が当時の流行の科学であると考へる植物学と化学に求める。そして方法論的にみて最も低い段階にあると考へられる植物学に於いてすら、そこには何らかの目的が、あるいは答の想定に基づく問ひかけといふ形での先行する観念が存在してゐるとするのである。それはまづは仮定といふ形で先行してゐる。しかしその仮定の普遍妥当性が信じられるためには、その核となる概念の本質への洞察からその必然性が導かれなけれ

ばならない、とコウルリジは考へる。例へばリンネは、植物の性に関する概念を先行する他の自然学者達から取り入れ、その上に彼の分類法を基礎付け、さらにそこから植物学の言語のための普遍記号法を考案した。しかしリンネの方法は、植生そのものに関する中心概念や、性そのものの構造的本質や内的必然性に対する洞察が欠けてゐる。その結果、後継者たちの苦勞にも拘らず、植物学の現状は巨大な名称目録以上のものではなくなつてゐる、とコウルリジは観るわけである。¹⁰⁾

一方、化学の場合、分解不可能な実体といふ実験室での仮定がある。それは本源的な諸力のシムボルとも、法則の具現者とも考へられるものである。化学者は、自らの理論が何であれ、それらすべての諸力の根底にあるものとして、法則を導き出すために本能的な努力をする。そしてこの本能は、精神の内部で法則に対応するものである観念 (idea) が、そこに於いて萌芽的な姿を現はす形式 (form) に他ならないのであり、従つて、多様性の中に統一的原理をさらに求め続けるものなのである。つまり化学に於いては、先行的に発動する精神が本質への洞察に結びついてゐるが故に、理論は法則へと達しようとコウルリジは考へる。シェイクスピアに於いては、その深い観察力に富んだ思考の創造的力によって、自然が詩へとイデア化されてゐるが、化学者デイヴィの思考力に富んだ観察を通すと、今度は詩が自然の中へと実体化され実在化されることになるのである。¹¹⁾

このやうに方法といふ観点から科学観を展開することで、コウルリジは諸科学の本質を解明し、その全体を展望する道を開いたといつてよい。科学が方法に従つてゐる場合、そこには必ず精神の先行的発動 (mental initiative) が見られ、何らかの統一的原理が想定され、その下での持続的進行がある。その想定は、実験や観察から抽象一般化されたものではなく、むしろその進行を導くものである。経験から理論を導くには、それに先立つ理論が必要となる。しかし数学の場合は、定義が対象を産出し、後の展開のための諸概念を予め設定する。数学者はその設定に関係したすべてを導出できるのであり、数学者の哲学的思索は完全なものとなりうるのである。オイラーを引用しつつコウルリジは、経験と合ふかどうかは妥当性の基準とはなりえないとしてゐ

る。一方、自然学は、その対象は可知的実体ではなく、自然界の事物であり、観察や実験に従属的とならざるをえない。理論はたった一つの新事実の発見で覆されるのである。従って理論や仮説は、それが内に含むアイデアを具現してゐるか、或いは未発見の法則のシムボルとなるるかどちらかで、初めて真の科学的方法の根拠となりうるわけである。¹²⁾ コウルリジは電気学と磁気学を比較する。電気学に於いては、ある理論に直結する事実の発見があつて以来、急速な進歩があつたが、それはその理論が対立する二つの力といふ觀念 (idea) を含んでゐて、そこから二極性といふ自然界を支配する法則が導かれ、従つて真の方法が与へられたからである。しかるに磁気学に進歩が見られないのは、その諸仮説がただ同一の事象を拡大して繰り返して述べてゐるに過ぎず、問題の再提示ではあつてもその解決とはなつてゐないからなのである。¹³⁾

かくして方法の概念は、諸科学の本質の解明に資するだけでなく、その展開と現状を認識評価する鍵を提供してゐるわけである。

III. 方法と存在 — 哲学と宗教 —

個別と普遍の媒介といふことを基調としたコウルリジの方法概念は、存在の問題にどのやうな展望を与へるであらうか。

方法から見た認識の問題は、科学と哲学の媒介によって、いかに真の科学を実現するかの問題であつた。それは精神が、個別の事象をまづ対象としつつも、それを精神の内に先行して存在する普遍的関係規定によって、いかに把握し位置づけてゆくかの問題であつた。そして先行するものが、その普遍への志向に於いて、真實在である根源的原理にどれだけ近づいてゐるかで、個々の科学の現状とその評価が決まつたのであつた。認識の問題に見られるこの方法の基本図式は、存在の問題にどのやうに関はるであらうか。

Biographia Literaria に於いては、存在の問題は、第一原理を「我在り」とし、それを精神、自己、自己意識などと同一視することで、認識の問題と同様に、表出の論理の中で解かれてゐた。精神の本質は知

性であり、自己意識とは知性が自己に対して自己を定立する行為であり、それは知性の自己表出に他ならない。そしてこの知性の自己表出こそ、無限なる知性の有限なる精神への表出であり、認識の本質をなすものであった。一方自己意識は、存在の原理としての無限なる「我在り」が、有限なる精神の内にその存在の根拠として顕現する場所なのであり、そこに於いては認識することと存在することは一体であるとされたのである。認識の原理 (principium cognoscendi) と存在の原理 (principium essendi) は自己意識に於いて一致してをり、その自己意識の本質は意志を含んだ能動的知性であった。¹⁾ そしてその自己意識の本質に於いて、有限なる精神と無限なる精神は一体となつてゐると考へられたのである。しかしここでは、個別の事象との関わりから出発する、有限なる精神の手段としての方法が、存在の問題にいかなる寄与を為し得るかが問はれねばならない。

方法の原理を扱った一連のエッセイの最後に於いて、コウルリジは次の問を發する。

あなたはかつて自らの心を、単なる存在するといふ行為としての存在そのものの考察へと向けたことがあるか。あなたはかつて深い思ひを込めて自らに「それが在る！」と言ったことがあるか。その瞬間には、それがあなたの目の前の人であらうが、花であらうが、一粒の砂であらうが気にも留めず、つまりは存在のあれこれの特殊な様態や形式に構ふことなくである。もしあなたが本当にこのことを達成したならば、あなたはある神秘の現前を感じ、その神秘はあなたの精神を恐れと驚きで動けなくしてしまふことであらう。何も存在しないと、何も存在しない時があつたとかいふ言葉そのものが自己矛盾である。そのやうな命題を一瞬の充満した光によって退ける何か、私達の内に在る。あたかもそれが、それ自身の永遠性といふ権利に於いて、反証を行なつてゐるかのやうに。

(Collected Works 4, The Friend I, p.514)

この驚くべき問いかけは、有限の精神に対して、個々の存在者の存在

を通して存在そのものの考察へ向かふことを呼びかけてゐる。存在が単なる普遍ではないとすれば、この問ひかけに於ける精神の働きは、個別と普遍の媒介といふ、認識の問題に於いて当てはまった方法の規定には沿ってゐないやうに見えるかもしれない。しかしそこには個別の存在者の存在から出発して、それを越えたもの、単なる普遍よりさらに根源的な何ものかへの方向付けが見られることは確かである。コウルリジはこの問ひかけに続けて、「もしこの絶対の存在の直観を達成したならば、あなたは、他でもないこれが、過去に於いて、選ばれた人々の高貴なる精神を、ある種の神聖な畏怖の念で捕へて離さなかつたものであることを知るであらう。これこそが、彼等をして初めて自らの内に、自らの個としての本質を越えた言葉にできぬほど偉大な何ものかを感じしめたのである。」²⁾と述べてゐるのである。

個々の存在者の存在から、この存在そのもの、つまり「その本質に於ける存在、無限なる存在」の観念を生ぜしめる力、これをコウルリジはイデアそのものとしてその起源を問ふ。そしてそれを、個別の事象の中や、専ら個別の事象と関はってそこから抽象や一般化を行なふ能力、つまり感覚や悟性といった人間の相対的個性を構成する能力の中に求めることを否定する。しかしその力は存在する。それは、存在そのものの最高性に於いて「存在する」。それは絶対的に一なるものであり、「存在する」がその唯一の述語である。つまりそれは存在そのものであることとなる。そしてそれは、人が生命や光について述べるまさにその時に、自らの精神に対しその存在を証言できるものである。それは、人がそれを住処とする時にのみ、人の内に住まふものである。コウルリジは、それが開示する真理はそれのみが開示できる真理であり、すべての真理の内にそれは自らを開示するとする。そしてこのやうに開示された真理こそが啓示であり、それを開示する力こそ神(GOD)に他ならないとするのである。³⁾

存在の問題に方法を持ち込むことによって、コウルリジは、有限なる精神が個々の存在者の存在の考察から出発して、宗教へと到達する道を見出したといつてよい。しかし個々の存在者の存在から存在そのもの、つまり根源でもあり、力でもあるやうな「絶対の存在」を直観

するためには、その直観がそれと同質の存在でなければならず、ここでは知性が心情と切り離されることなく一体のものとして発動されなければならない。⁴⁾ 知性は、普遍や無限によってそしてそれらに於いて、個別を個別として認識把握することができる。しかし知性のみでは、一方の存在から他方の存在へと移行することは不可能なのである。⁵⁾ 従ってこの直観は、「すべての真実在の根拠としての意志」によって、驚きと共に発動されるものでなければならない。アリストテレスとプラトンを引用しつつコウルリジは、哲学は驚きに始まり、驚きの内に終るとしてゐるのである。⁶⁾

コウルリジは、真の哲学の根本原理は、理性による思考と単なる悟性の学との相違を完全に把握することにあるとする。後者は、私達が自然と精神、主観と客観、事物と思考、生と死を対立させ、自らを個別の存在と考へる時に成立する知識であり、つまりは抽象的知識に他ならない。それに対し前者は、私達が自らを全体と一体のものとして捉へた時に生じる事物の直観であり、実体の認識そのものであるとするのである。⁷⁾ コウルリジは、さらに、前者によってこそ、私達は存在とは何かを知るとする。存在とは、それ自身の述語であり、自己肯定である。それはある一つの属性でもあるが、自らの内に他のすべての属性を、その部分としてではなく、その顕現として含むものなのである。それは永遠のそして無限の測り知れない喜びそのものであり、愛そのものである。それは絶対的なものであり、肯定するものとされるものの一致であり、両者の活ける連辞なのである。⁸⁾ 存在は存在である。

かくして悟性と区別されたこの理性こそ真の方法の担ひ手であり、哲学を宗教へと媒介するものであるが、その本質は意志を含んだ能動的知性といふことになるであらう。この理性の本質規定によって拡張された知性概念は後に自己意識といふ概念装置の中に吸収され、表出の論理の基礎とされることとなる。理性による直観は方法の出発点でもあり、その到達点でもある。それは有限なる精神を、個々の存在者の存在への驚きから存在そのものの考察へと導き、無限なる「我在り」と合一させるのである。

結語 存在は存在である

存在の問題を方法との関係で考察すること、それによってコウルリジは、有限なる精神がその最高の在り方に於いて自らを見出す道を示した。それは存在そのものに到達する道である。それは、「存在は存在である」といふ何かによって根拠付けられることを拒否した、それ自身にしか根拠をもたないこの同語反復的命題を理解することである。それは何かの知識の問題ではなく、人間の在り方あるいは在りうる唯一の知識の問題である。この在り方に於いてのみ人間は絶対者と一体化できるのであり、あらゆる地上の苦難から自由になれるのであり、自己自身、他者そして世界と融和できるのである。このあらゆる相対化を免れた在り方に於いてこそ、人間は崇高でありうるのである。

注

序説

- 1) コウルリジの言語思想に関しては、拙論「自然・精神・言語」（「記号学研究 10」所収），“The Ultimate Natural Language”（“CONTEXTURE No.7, Liberal Arts Bulletin of Saitama Institute of Technology, 1989” 所収）で詳しく論じた。
- 2) 表出の論理によるコウルリジの思想の再構成は、拙論「想像力と表出の問題」（「記号学研究 12」所収），“Imagination and Expression”（“CONTEXTURE No.9, Liberal Arts Bulletin of Saitama Institute of Technology, 1991” 所収）の中で試みた。
- 3) 山内志朗「スピノザとマテシスの問題」（「現代思想，1987,9」所収）p.84.
- 4) Coleridge, S. T., Collected Works 6, Lay Sermons, The Statesman's Manual, p.29.

I.

- 1) Coleridge, S. T., Collected Works 4, The Friend I, pp.450-1.
- 2) Ibid., p.449.

- 3) Ibid., p.450.
- 4) Ibid., p.453.
- 5) Ibid., p.457.
- 6) Ibid., p.457.
- 7) Leibniz, G. W., Die philosophischen Schriften, hrsg. von C. I. Gerhardt, Berlin 1875-80. Reprint: Hildesheim 1969. Bd., p.317.

II.

- 1) Coleridge, S. T., Collected Works 4, The Friend I, p.463.
- 2) Ibid., p.458.
- 3) Ibid., p.459.
- 4) Ibid., pp.459-60.
- 5) Ibid., p.461.
- 6) Ibid., pp.461-2.
- 7) Ibid., pp.462-3.
- 8) Ibid., p.464.
- 9) Ibid., pp.465-6.
- 10) Ibid., pp.466-9.
- 11) Ibid., pp.470-1.
- 12) Ibid., pp.476-7.
- 13) Ibid., pp.478-81.

III.

- 1) Coleridge, S. T., Collected Works 7, Biographia Literaria I, p.285.
- 2) Coleridge, S. T., Collected Works 4, The Friend I, p.514.
- 3) Ibid., pp.514-6.
- 4) Ibid., p.519.
- 5) Ibid., p.520.
- 6) Ibid., p.519.
- 7) Ibid., p.520.
- 8) Ibid., p.521.

結語

Coleridge's Works

- The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge, ed. by K. Coburn and B. Winer, Vols. 1-7, 10, 12, 13, and 14, 1969~.
- Collected Letters of S. T. Coleridge, ed. by E. G. Griggs, 6 vols., 1966.
- Imagination in Coleridge, ed. by J. S. Hill, 1978.
- The Notebooks of S. T. Coleridge, ed. by K. Coburn, 3 double vols., 1957-73.
- The Portable Coleridge, ed. by I. A. Richards, 1950.
- Aids to Reflection, second ed., London, 1831.
- Biographia Literaria, ed. by J. Shawcross, 2 vols., 1907.
- The Philosophical Lectures of S. T. Coleridge, ed. by K. Coburn, 1949.